

大阪大学東アジア拠点設立5周年



海外交流

大谷 順子*

5th Anniversary of Osaka University's overseas office in Shanghai

Key Words : 5th Anniversary, overseas office in Shanghai,
East Asian Center for Academic Initiatives

1. はじめに

2014年4月、大阪大学東アジアセンター（英語名は、East Asian Center for Academic Initiatives、<http://www.shanghai-center.osaka-u.ac.jp/j/>）のセンター長（3代目）を拝命致しました。本稿では、2010年に「上海教育研究センター」として発足し、今年で5年目を迎えるとともに4月に「東アジアセンター」と改名した本センター設立の背景を簡単にご紹介するとともに活動の近況についてご報告します。今後、センターをフルにご活用いただくために皆様のご協力、ご支援、ご提案を請いたいと思います。

大阪大学は、サンフランシスコ（米国）、グローニンゲン（オランダ）、バンコク（タイ）に次いで、4番目の海外拠点として、中国に東アジアセンター（上海オフィス）を開所し、2010年2月1日から業務を開始しました。私は、当時、辻毅一郎理事・副学長が本学の国際関連事業をご担当されていた時代より、上海センターWG委員として、協力を行ってきました。センターは当初、上海交通大学の徐家匯地区に開設されましたが、2013年9月に、同済大学のビルに移転されました。市内からは少し離れることになりましたが、地下鉄10号線の同済大学

駅に直結する同済大厦A楼というビルの8階に入っておりアクセスは良いですので、ぜひご活用いただければと思います。復旦大学をはじめ上海の名門大学が多くある地域です。

上海に本学の拠点を新設するというアイデアは、2009年度、世界最高水準の研究を行うとともに、「教養、デザイン力、国際性」を身につけた国際社会で通用する人材を輩出してきた大阪大学が、「地域に生き、世界に伸びる」をモットーとして、地域に根ざし、世界に開かれた魅力ある大学を目指すため、全学の組織を挙げて、国際交流を推進し、大学の国際化を図るという背景のもと、「国際化拠点整備事業（グローバル30）」に申請するに際し、その提案に盛り込まれたものでした。

実際、大阪大学は、中国の多くの大学や研究機関と多数の大学間交流協定や部局間交流協定を締結し、研究者及び学生の交流を積極的に展開しています。「グローバル30」の事業構想の中で、2009年当時約1,600人の留学生を10年後には3,000人と倍増し、そのうち中国からは、当時450人余（全体の約3割）を全体の約4割、つまり1,200人とする目標を掲げていました。2014年現在、大阪大学の留学生2,000人のうち、800人は中国からの留学生となりました。

海外から来日する留学生のなかで中国人留学生の数が最も多いことは周知の通りですが、近年、中国から諸外国に派遣される留学生の数は急速に伸び続けているものの、日本への留学は横ばいとなっています。このような状況を踏まえ、以前に増して、中国人留学生の受け入れを強化するというのが大阪大学の目標であり、さらに、中国の発展した沿海部に限らず、西部や内陸部からも優秀な人材を集め、また、中国や台湾、韓国はもとより、中央アジアも含むより広い地域の高等教育機関との連携や学生交流を推し進めるため、2014年4月には名称を「上海



* Junko OTANI

大阪大学園学部卒（1992年）ハーバード公衆衛生大学院MPH・ロンドン経済政治学院（LSE）衛生熱帯医学校（LSHTM）PhD
現在、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学研究科グローバル人間学専攻教授・海外拠点本部東アジアセンター長
PhD 地域研究・国際保健・人口学
2015年9月より副理事（社会学連携室員）。
TEL：06-6879-8084
FAX：06-6879-8084
E-mail：otani@hus.osaka-u.ac.jp

教育研究センター」から「大阪大学東アジアセンター（上海オフィス）」に変えました。星野俊也副学長（海外拠点長）（8月26日より理事・副学長（国際担当））とともに大阪大学の「シルクロード展開」を目指しています。

さて、大阪と上海は、飛行機でわずか2時間の距離です。両市は、姉妹都市の関係にあり、上海は中国のハブとして、中国全土とも結ばれています。中国においてもトップレベルの大学が上海とその周辺に多く存在しています。最近、中国政府が「2大学1市」と言い始めたのは、北京にある北京大学と清華大学、そして上海の大学群を指しているようです。ここには大阪大学と大学間交流協定のある上海交通大学、復旦大学、南京大学、浙江大学、同済大学の他、上海外国語大学はじめ多数の部局間交流協定校が存在します。

開設場所としては中央集権国家の中国では首都である北京ならでは利点もあるものの、極めて政治色が強い北京では、日中関係の動向に影響を受けることも否めません。北京に事務所を構える大学の苦労話などを伺うと、上海にオフィスを置く利点も決して少なくないと考えています。

2. 東アジアセンターの近況報告

1) 現地ネットワークへの参加

東アジアセンターとしては、希平会（日本学術振興会北京連絡事務センターが主催し、平和を望み両国の交流の発展を望む会として命名）の活動に参加することが一つの柱となっており、出張ベースでこなす用務の日程調整をするペース・セッターになっています。希平会は、現在、佐藤利行・広島大学理事・副学長（国際・基金担当）が議長で、センター長は神戸大学の和田修先生が任期を終え、本年4月より東京工業大学から廣田薫先生が就任されました。私は、その定例会に参加し、中国に事務所を持つ日本の各大学組織、また日本大使館、日本学術振興会（JSPS）、科学技術振興機構（JST）の北京事務所などとの勉強会・情報交換に参加しています。そうした会合には中国側教育機関からの講師を招くこともあります。また、在中国日本人研究者ネットワークが設立され、そちらにもセンターとしても積極的に参加しています。

2) 留学説明会などへの参加

留学フェアは、希平会が中国で主催するもののほかに、日本学生支援機構（JASSO）、国際協力機構（JICA）日本センターが主催する留学フェアに参加、部局の参加支援を行っています。希平会主催の2014年の留学説明会は、大連理工大学、復旦大学（上海）、東北大学（瀋陽）、東北師範大学（長春）、東北師範大学赴日本国留学生予備学校、山東師範大学などで開催され、センターから参加しました。ここでは、阪大で学位を取得したが、指導教官も退官し、同級生も異動したりで、縁もなくなってしまっていたという教授が喜んで懇親会に駆けつけてくださる出会いもあります。

JICA日本人材開発センターが主催する日本留学フェア（日本大使館、JASSOも共催）への参加では、シルクロード展開につなげるようにしてきました。これには、本学からは経済研究科なども参加しています。留学フェアだけでなく、教育省対外国際部、モンゴル国立大学などトップ大学や新モンゴル高校などの名門高校を訪問し、現地の教育制度の状況、日本留学のための課題、中国や欧米からのモンゴル留学生獲得作戦の状況などの情報の収集もしています。こうした機会を通じ、カザフスタンのアル・ファラビ名称カザフ国立大学やユーラシア大学との新たな交流協定の締結を実現につなげました。すでに締結されているモンゴル国立大学などとの協定のフォローアップやコンタクト・パーソンとの連絡調整なども行いました。

留学フェア以外のイベントなどにあわせて、協定校への表敬訪問や、協定校への理事の表敬訪問のアテンドも行います。日中学長会議は、今回は2015年10月末に九州大学で開催される予定ですが、これは2年に1回開催され、前回は2013年に厦門大学で開催され、平野総長（当時）が日本側の代表講演を行い、「世界適塾」構想を紹介しました。

3) 国際交流関係の会合参加

アジア太平洋国際教育協会（APAIE：Asia-Pacific Association for International Education）などの会合では、地域を超えて、欧米の大学や大使館からの招待に対応したり、入手した情報を持ち帰り、学内の担当者へつないだり、次回の関連イベントでのフォローアップをお願いしたりします。

4) 同窓会ネットワークの支援

センターの活動としては、海外における同窓会ネットワークの支援も重要です。中国では、任意の団体の組織化が難しいという背景がありますが、上海での同窓生の交流は活発です。大阪大学同窓会と咲耶会（旧大阪外国語大学・大阪大学外国語学部）上海支部の合同同窓会を継続的に開催しています。昨年度は、センター長として香港に出張した際に、大阪大学香港同窓会と咲耶会香港支部との合同の食事を開催しました。2014年は新たに、台湾、モンゴル、カザフスタンなどで同窓生との懇親会を開催しました。特に、台湾では、日台交流協会（大使館相当）、台北駐大阪弁事処文教課（台湾政府駐大阪総領事館相当）やロータリー米山奨学金学友会、咲耶会本部事務局の協力のもとに広報等を行い、台北だけでなく、台中や高尾からの参加者も交え、総勢35名となる盛況となりました。また参加者の9割が台湾各地の大学教員であったというこのネットワークも活かすことが今後の本学の学術交流にとって大事だと思います。参加者からは、台中や高尾でも開催してほしいといった希望が寄せられました。モンゴルでは阪大への留学経験者が国立モンゴル大学、国立モンゴル科学技術大学などの国際部、また日本大使館などに勤務しており、大事なネットワークと言えます。なお、咲耶会事務局には、ホームページに本交流会について掲載いただくほか、広報にご協力いただいています。

5) 本学学生の留学サポート

私は、平素より、交流協定によって派遣されている本学の学生や私費で留学している学生たちと現地で交流し、一人ひとりの問題の把握と安全確認に努めています。PM2.5やMERSなどに関する相談にも対応し情報提供をしています。留学中の阪大生のリスク対応はとくに重要です。香港での民主学生運動の報道を受けて、香港中文大学に留学中の本学生（交流協定による者と私費留学生の両方）の安否確認および注意喚起などは迅速に行いました。香港中文大学との大学間交流協定は、5年前に私がコンタクトパーソンとして結んでいますので、その制度を利用して成長していく学生たちを実際に見るのはありがたいことです。香港同窓会では、香港で活躍する先輩方からいろいろなアドバイスをもらい、二次

会にも連れて行ってもらうなど大変可愛がってもらい、学生たちには自分の将来を考える大変貴重な機会となりました。平常時より、上海の日本総領事館や北京の日本大使館、香港の総領事館、日台交流協会などの在外公館と連絡をとり、便宜を図っていただいています。

ところで、リスク管理に関しては、私は大阪大学が実施しているリーディング大学院（第1部門：超域イノベーション博士課程プログラム）が学生派遣および教職員出張時における緊急時サポート体制の調査を行った機会に調査協力を行なったことがあります。その時、私たちは、日本人対応医療機関のリストの作成や、保険や現金の有無の条件を確認し、また、代表的な医療機関を訪問し、施設の見学や現場スタッフとの意見交換を通じ、日本人医療従事者の有無、日本留学経験医療従事者の有無、現地の大学病院などとの連携状況やスタッフの日本語能力や医療通訳者の在不在などについて情報を得ました。特に、大手の上海グリーンクリニックでは、森本泰弘・董事長・総経理（阪大経済昭和50年卒）などの同窓会ネットワークもあります。さらに、インターンシップの相談でも、在上海の同窓生への紹介など相談に対応することもあります。

6) 学内部局の国際交流活動の支援

東アジアセンターのオフィスを使って、大阪大学への留学希望者と部局との面談支援や現地大学・高校訪問の支援も行っています。上海中学・上海高校国際部の留学フェアへの参加、その他の大学や高校の訪問、それに本学が提供する人気の高いユニークな英語学位プログラムである「生物科学ダブルメジャーコース（CBCMP）」を紹介する高校訪問のアレンジや同行支援も行っています。

現地大学との交流支援の具体例としては、2015年3月に外国語学部が同済大学に派遣した短期語学研修の現地支援があります。同研修の最終日の修了式には上海を訪問中の星野副学長と連れだって参加をし、現地での学修と生活体験を通じ中国語が格段に上達した学生たちの元気な様子に接し、とてもうれしく思いました。また、6月に同済大学が交流協定校の学生たちを招いて開催した英語による国際ワークショップ「Sustainable Urban & Rural Development」に際しては、私はセンター長として参加し、

最終プレゼンテーションの審査委員にも加わり、1位から3位に賞を授与しました。学期中ということもあり本学の学内ウェブ情報システムである「KOAN」には掲載したものの阪大からの応募はありませんでしたが、上海に留学中の本学学生と連絡をとり、ちょうど休暇の週であったので上手く参加をアレンジすることができました。これは、参加学生にも中国語だけでなく英語を用いて参加するととても良い機会となり、一方で、同済大学のスタッフには大阪大学の学生のレベルの高さに感激されました。

また、2014年には、医学部附属病院国際医療センター (CGH) が、上海で国際シンポジウムを開催するにあたり上海総領事館への紹介や会場手配など協力を行いました。また、このイベントのときもですが、いろいろな活動の広報を、現地のソーシャルメディアである微博 (ウェイボー：中国語版ブログ) や微信 (ウェイシン：中国語版LINE) などを使って行い、大きな反響を得ています。

さて、私は来る本年11月に予定されている台湾政府の招へいによる日本の大学院生訪問代表団 (阪大生に限らず) の団長を引き受け、予定しています。推薦枠も確保しています。

3. 東アジアセンターの国内における活動

東アジアセンターのセンター長は他の海外拠点のように常駐ではないため、現地での活動時間は比較的少なくなることによる課題はありますが、一方で、私は大阪からの出張ベースの勤務であることによる強みを活かすように努めております。

大阪大学では中国からの大学生訪問団も頻繁に受け入れております。例えば、本年5月27日には第14回中国大学生日本訪問プロジェクト「走近日企・感受日本」(日中経済協会) による北京などの大学からの40名の学生を受け入れ、6月9日には外務省事業「JENESYS2.0—中国大学生訪日団第10陣—」(日中友好会館) 130名を受け入れました。私も本学コンベンションセンターのMOホールにて開催されたセッションで自分の研究分野である災害国際比較研究の講演を行い、多くの学生に興味をお持ちいただきました。災害は環境とあわせて日中の協力していく重要な分野であると考えています。また、この事業では中国の学生たちと大阪大学の学生たち

との交流もたいへん良い経験となりました。中国から本学に留学してきている大学院生たちも自分の経験談を話し、それを聞いた学生たちに好評で、自分たちのキャリアパスを考える上でも刺激となり、今後、ぜひ大阪大学へ留学したいとの感想も多く寄せられました。

また、本年6月には、同済大学・華東大学MPA社会人学生らが本学を訪問された際には国際公共政策研究科と共催でセミナーを実施いたしました。

中国総領事館からの依頼に対応し、共産党・大学研究者などの中共中央対外連絡部訪問団との対話、カザフスタンのアルファラビ名称カザフ国立大学物理工学部長がご来訪された際の接遇、台湾のトップ高校である台北市立建国高級中学校 (高校) の教員4名を含む87名が修学旅行の一環としての本学 (吹田キャンパス) の訪問対応にも協力させていただきました。他に、優秀な中国からの留学生を獲得するためのシンポジウム (東京) に参加し、情報収集を行うようにしています。国際教育協会 (IIE) 東南アジア支部 (中国以外のアジア全域担当、すなわち、日本も担当) ディレクターの来訪に対応し、シュワルツマン財団の奨学金プログラムなど情報収集・意見交換会を開催しました。

さらに、中国圏を担当するなど国際機関で活躍している職員などをゲストスピーカーに招き、国際開発セミナーシリーズを東アジアセンター共催で公開セミナーとして開催し、学内や国内でのプレゼンス、認知度の向上に努めています。

本年は、本学の中之島センターで開催された外務省・大阪大学共催シンポジウム「北東アジア情勢の展望～よりよい善隣関係を求めて～」にも協力をしました。本シンポジウムは星野副学長・海外拠点長 (当時) が外務省大阪分室と共同で企画をし、モデレーターを務めたものですが、私も本学の東アジア関係を担当するセンター長としてパネリストに加わりました。会合には関西一円の各国総領事館や名誉総領事館や企業関係者の他、多くの一般の参加者を得て、活発な議論になりました。本学の学生たち (外国語学部、国際公共政策、法学、人間科学、文学各研究科など) も多数参加し、中身の濃い質疑を行い、懇親会では、元大使など外務省OBや企業のトップを含む来場者の各位から就職のアドバイスを受けるなど、学生にも良い機会となり、歓迎されました。

4. おわりに

東アジアセンター長を拝命してから一年余りが経ちました。次々とイベントをこなすことに精いっぱいな一方で、いろいろな課題も見えてくる一年間でした。

私は、1992年に大阪大学歯学部を卒業し、小児歯科学講座で勉強させてもらい留学準備をし、米国のボストンに留学をしました。ハーバードエイズ国際センターで働きながら、ハーバード公衆衛生学院で国際保健学・人口学の修士を取得し、アトランタにある米国疾病管理予防センター（CDC）でインターンをし、さらに東京の結核研究所で宮澤イニシアティブのアジア地域のエイズ対策の仕事をしたあと、ワシントンDCにある世界銀行アジア局でアジア諸国の保健や教育分野の社会開発の仕事に従事しました。その後は世界銀行の奨学金を得て、ロンドン衛生熱帯医学校（LSHTM）・経済政治学院（LSE）において博士号を取得し、国連大学高等研究所で一年研究員をして、世界保健機関（WHO）の中国代表処（北京）とジュネーブ本部での勤務を経て、大学教員となって帰国する好運に恵まれました。前任地の九州大学では国際担当理事・副学長から「今まで考えられなかった人事ですが、高等教育のグローバル化に対応するために必要とされている人材です。よろしくお願いいたします。」と言われ、いろいろな機会をいただきました。そして、母校の大阪大学に異動することができるという奇跡的な道が開かれました。人間科学研究科に就職してからまもなく人間科学も本学のG30プログラムの運営に組み込まれ、そちらへの協力も依頼され、また、国際本部の仕事、上海センターWG委員などいろいろな仕事に声がかかり、大学に就職する前には思ってもいなかった展開となりました。

日々の用務は、大学組織についての勉強に次ぐ勉強の連続でもあります。人員や予算に限りがある状況下で、本部の海外拠点系の職員や現地スタッフとはお互いに知恵を絞ってやりくりする同志のような関係で、ここからもひとつのやりがいを感じています。また、海外拠点のセンター長を兼任している間

は本来の専門分野の研究の時間がなかなか取れないという葛藤があることも正直なところですが、なんとか相乗効果が得られるように結び付けたいと思います。また、いろいろな意味で揺さ振りや改革圧力を受けている大学環境の中で、大阪大学のグローバルな展開のための一端を担うべく貢献していくことができるように邁進してまいりたいと思います。

引き続き、よろしくご支援、ご指導のほどお願いいたします。

参考文献

- 大谷順子 (2014) 「学術交流を通しての日中友好促進と次世代の育成をめざして ～大阪大学東アジアセンター長 大谷順子～」 JSPS 北京研究連絡センター『学思』第44号 8-9頁 (和文)
<http://www.jpsps.org.cn/jpspsbj/site/dzzzjp/zxqkjp.htm>
- 大谷順子 (2014) 「“让学术交流架起日中友好的桥梁” ～大阪大学东亚中心主任 大谷顺子～」 日本学术振兴会北京代表处『学思』第44期8-9頁 (中文)
<http://www.jpsps.org.cn/jpspsbj/site/dzzzch/qkmlch-No.44.htm>



2015年3月開催の大阪大学上海同窓会と咲耶会上海支部合同同窓会。今回は、外国語学部学生の同済大学短期研修参加を期に開催された。

前列左から3人目は岡田健一上海総領事館首席領事、続いて、東和男前同窓会会長（基礎工学部機械工学卒）、星野俊也副学長・海外拠点長（当時。現在、理事副学長）、大谷順子東アジアセンター長、河野由香（咲耶会上海支部世話役）、ひとりおいて、董孝銘弁護士（阪大上海同窓会世話役）、叶曉 東アジアセンター長補佐。